名古屋学院大学研究年報　第22号（2009．12）

岡山時代の三谷隆正

――自己中心と他者愛――

葛　井　義　憲

はじめに

内村鑑三の弟子に，三谷隆正という人物がいる。その姉に三谷民子，兄に長谷川伸がいる。三谷民子は近代日本の女子教育の功労者（女子学院院長）であり，隆正を「我が子の如く」愛した異母姉であった。長谷川伸は大衆文学の質的向上に尽くし，多くの弟子たちを育てた小説家（「瞼の母」「一本刀土俵入」が代表作）であり，隆正の異父兄である。彼らの中に共通して流れているものの一つに，「他者愛」がある。これは彼らの家庭環境がもたしたものなのかもしれない。そうした「他者愛」が新渡戸稲造や内村たちを通して知らされた「十字架のキリストの贖罪と救済と愛」に培われて，隆正に徹底的な「他者愛」「他力」をもって生活させようとする。そうした精神的な展開を，本稿では彼の岡山時代(1915年～1926年)を中心において，内村鑑三，有島武郎たちの言行と突き合わせながら考究してみたい。そしてここで取り扱う時代は明るさと暗さを混在させた頃であった。都市では，都市新中間層が夫の給与で家庭を形成し，子どもの成長，教育に大きな関心をもつ一方，地方は生活の窮乏を来たし（1918年8月，富山県で起こった米騒動が全国的に波及する），隣国は日本の侵略に対する抵抗運動（1919年3月，朝鮮で3・1運動，同年5月，中国で5・4運動が起こる）を行っていた。こうした時代を背景として，三谷の真剣な自己凝視が行われる。

一　「自己愛の近代人」

第六高等学校教授（1915年9月～1926年3月）であった三谷隆正が同校辞任直後に処女作『信仰の論理』（1926年4月）を岩波書店より出版した。その書物の「はしがき」に，同書上梓の発端が1924（大正13）年に神のもとへと送った娘晴子（3月29日帰天），妻菊代（7月4日帰天）に対する「記念の手向草」であったことを記述している。そして同書本論は「主我」「自己中心」をテーマとして書き出されている。「欧州大戦〔1914年～1918年〕の始まった頃から，英米人は切（しき）りと独逸人の主我癖（エゴチズム）を非難した。独逸人はいつも自分を考へ，自分に屈託してゐて，悠然として自他を客観するだけの余裕をもたない。洒脱（ヒューモラス）な所がない。朝から晩まで大真面目でムキになつてゐる。だから戦争なんか始めるのだ。こういつて非難した。米国の或る学者は「独逸哲学の主我癖」と題する一書を著した位である。然しかく批評し非難する英米人自身が，どれほど非主我的であるか。主我癖は独逸人ばかりの持つ欠点でない。英米にも仏伊にも日本にも，現代どの国にも共通な色彩が主我癖である。何事にも自分に出発し，自分を中心にし，自分を究極にして考へるその考へ方である」（『三谷隆正全集』第1巻岩波書店，1965年，11頁）と。

哲学者カント（I. Kant 1724年～1804年）に学び，神学者アウグスティヌス（Augustinus

354年～430年）を研究し，カントに造詣のあった法学者ヒルティ（C. Hilty 1833年～1909年）の書物に親しみ，聖書を魂の糧とし，内村鑑三（1861年～1930年）に師事した三谷（1889年～1944年）は，ギリシャの哲学者プロタゴラス（Protagoras前500年ごろ～前430年ごろ）が語った「人は万事の尺度なり」を継承する「自分を中心にし，自分を究極にして考へるその考へ方」に関心を示しつつも，距離をおかなければならなかった。法哲学者の彼もまた，18, 9世紀に大きな影響を人々に与えた「啓蒙主義（die Aufklärung）」，人間の「理性の光」で種々のものを吟味して「不合理」を排斥するこの「運動」に馴染んでいた。しかし，「人間の「理性の光」での吟味」「自分を中心にし，自分を究極にして考へるその考へ方」に全面的に同意することは憚られた。

彼はこの「自分を究極にして考へるその考へ方」について旧約聖書の創世記3章に描かれている「アダムとエバの転落物語」を用いて思索している。

創世記3・7は「主なる神に造られた野の生き物のうちで，最も賢い」蛇に誘惑され，神より禁じられていた「善悪の知識の木」の果実をアダムとエバが食べる場面である。そして果実を食べた彼らの目が「開け，自分たちが裸であることを知り，二人はいちじくの葉をつづり合わせ，腰を覆」ったと記述している。三谷はその箇所をとらえて，「自己の覚醒と神の喪失」を語る。

> 智慧の樹の実は彼等の眼をひらいた。而もそのひらかれたる眼を以て，彼等が先づ第一に注目したものは，神の聖顔でもなく，エデンの園のうるはしさでもなく，彼等自身の裸なる姿であつた。彼等は眼開かるゝと共に，先づ自己を見たのである。そうして神を見失つたのである。彼等は茲にはじめて「我在り」と悟つた。而もかくして悟られたる我は，神と別異なる存在を為す我であつた。かくて彼等は神より他なる自己に眼醒めたのである。そのことはやがて又神より背き去る事を意味したのであつた。故に二人はエデンの園を追はれた。楽園にありし間の二人は，渾然として神と一つなる二人であつた。それは美しい，まどかな生活であつたに相違ない。然しその時二人に人としての自覚はなかつた。禁断の樹の実は初めて彼等に自覚を与へた。而もそれは差当り先づ，神よりの乖離として，罪の痛苦と孤独とをもたらさゞるを得なかつた。爾来，人間は幾度か禁断の樹の実を喰べた。そうしてその度毎に，裸なる自己の姿に気をとられて，神を見失つた。或ひは自分自身を神にまで祭りあげた。そうして懐疑の不安さとさびしさとを味はつた。現代人の心の底に，斯る不安と寂寥との影の，如何に濃いことよ。（同書，15頁-16頁）

「我在り」との自覚，「他と別異なる存在」だとの発見こそが，一切の思索を「人間（アダムとエバ）」にさせ，そして自己自身で決断させ，実行へと向かわせる出発点となったことは間違いない。また，「神と一つなる」ことからの乖離は「独一無二の自己」である彼らに「罪の痛苦」を知らせ，また，「神を見失った」ことに対する「不安と寂寥」におののかせることになったであろう。しかし，他方，この「転落物語」が予測する「神に祭りあげられた人間」かが「自己を中心」にして徹底的に「利己」「自己愛」に生きようとする「構え方」には，三谷

は賛同しかねた。しかし，この三谷のかかる否定とは逆の事態が先生内村の周辺及びキリスト教界において以前より盛んになりだしていたようだ。内村は「欧州大戦（第一次世界大戦）」が始まる1914（大正3）年1月に発行した「聖書之研究」第162号で，「近代人」と題して「自己中心」に生きる近代日本のキリスト者像を分析している。

> 彼〔自己中心の近代日本人キリスト者〕は自己の欲望を去て神の聖業に参与せんと為ない，却て神をして自己の事業を賛成せしめんとする，近代人はキリストの下僕ではない，其庇護者（パトロン）である，彼は彼の哲学と芸術と社会政策とを以てキリストを擁立（もりたて）んとする，即ち彼はキリストに救はれんとせずしてキリストを救はんとする，彼は想ふ，キリストは彼の弁護なくして現代に於ける其神聖を維持する能はずと，所謂「近代人」は自己をキリスト以上に置て彼を批評する，曰ふ「我れ若しキリストの下僕となるならば我は研究の自由を失ひ，我が哲学は滅び我が芸術は死す」と，近代人は堕落せるアダムと同じく，自身を神とならざれば止まないのである，寔に彼はアダムの裔である，善悪の樹の実を食ひて目開けて神の如く成りし者である（創世記二章（ママ）を見よ）。（「聖書之研究」第162号聖書研究社，1914年，40頁～41頁）

キリストの十字架を見上げ，キリストに信従して，人間の罪，社会の悪と向き合う彼ならではの，近代日本人キリスト者に対する厳しい内部批判である。そしてこの内部批判に抗戦するかのように，内村の弟子であった有島武郎は1914年7月から8月にかけて「小樽新聞」に「内部生活の現象」というキリストとの断絶文を掲載した。それは「近代人」の中に描かれた「自己をキリスト以上に置いて彼を批評する近代人」の姿である。有島は「自己」を凝視し，点検して，それまでの自らの信仰生活を語る。「お前は教師や聖書から教へられた神と云ふ観念から，お前の理解の出来る丈けを切取つて神なりとして居たのだ。だからお前は神を信ずると云ふ事を広言してからも，お前の生活は実質的には何等の相違をも来たさなかつたのだ。若し相違が出来たとしたら，夫れは実に表面的な事であつて，神がお前の衷に住みますのを経験した事などは無かつたろう。お前が神を意識する時は何時でもお前の方から強ひてお前の頭を働かして，神を創造していたに過ぎないのだ。即ちお前の最も表面的な理智と感情との働きで，お前によく似た神を製造して居たのだ。而してお前は上からの力を受けて，お前が自分自身以外の生命に甦つて，已むを得ざるに振ひ立たねばならなかつたやうな経験を持つていないのだ。夫れだからお前の祈りは空に向つて投げられた石のやうに，冷たく力なく再びお前の上に落ちて来るばかりだつた。夫れにも係はらず，お前は切羽つまるまで，お前自身をあざむいて居た。」（『有島武郎全集』第7巻筑摩書房，1980年，94頁）。

有島が表す「人間の似姿（imago Humanae）」である「神」との論述は「自己」を疑わず，「自己」を中心として生きる「近代人」には納得しやすいものだっただろう。その表白に痛苦があったとしても，有島自らが拵えた「神」を自らの手で破棄することに対し，彼は逡巡しなかっただろう。しかし，この「神殺しを断行した人間」は独一無二の，絶対的な「能力」を有す存在なのだろうか。有島の死がこの問いかけに対する全き応答ではないだろうが，彼は「誇

り高い近代人」の末路を予兆するかのように，1923（大正12）年6月9日，自殺をもって悲劇的な幕切れを行った。

内村は有島死後の1924年2月に再度，「聖書之研究」第283号で「近代人に就て」を英文並びに訳文をもって執筆した。それはキリストの僕として生き，内村の後継者とも目された有島が波多野秋子と一緒に軽井沢で縊死したことをも踏まえてつづられたものである。そこには，神より造られたこの自らを，この自らの手で殲滅してもかまわないのだとの自己の傲岸・罪への厳しい批判がある。

> The modern man is terrible. He is egoism in its most spiritual form. He has no doubt whatever about himself, and is thoroughly convinced that he is right in all things. He subjugates all things to himself, and is subjugated by none. He has his own morality, and his own God and Christ. Thus he is entirely opposed to the Christianity, as handed down by the nineteen centuries of common Christian experience. The modern man is Civilization's spoiled child. His religion is selfness as opposed to the otherness of the traditional Christianity.
>
> ＊　＊　＊　＊　＊
>
> 近代人は恐ろしくある。彼は自己主義が極度に霊化したる者である。彼は自己に就て毛頭疑はない，而して万事に就て自己の判断の正しくあるを固く信ずる。彼は万物を自己に服従せしめんとする，然れども自己は何者にも服従しない。彼に彼れ自身の道徳がある。又彼れ自身の神とキリストがある。如斯にして彼は千九百年間の基督信者の実験として伝へられたる基督教には全然反対である。実に近代人は近代文明の生んだ駄々ッ児である。彼の宗教は伝統的基督教の他者奉仕なるに反し，自己奉仕である。(「聖書之研究」第283号聖書研究社，1924年，1頁)

「万物を自己に服従せしめ」「自己奉仕」に徹する「近代人」への痛烈なる内村の批判は日本社会及び世界に対するとともに，内村の門下に対するものでもあった。内村には「近代人に就いて」を発表した前年の9月1日（1923年）に起こった関東大震災後の「朝鮮人虐殺」という凶行に対する憂慮(鈴木範久著『内村鑑三日録』11教文館，1997年，288頁～290頁）があった。また，欧州大戦の終息をもって，その戦争に対する罪意識も，悔い改めもなく，ただ，国際連盟を発足（1920年1月）して，人類の平和，国際平和をもたらすのだと主唱するアメリカ国家の指導者たちに対する怒りがあった。アメリカ大統領ウィルソン（T. W. Wilson 1856年～1924年)を中心とする国際連盟構想に対し，「聖書之研究」第223号（1919年2月発行）で，内村は暴力・戦争をもって平和がもたらされると考え，また，残虐な戦争結果に対する心からの悔い改めを疎かにした当該連盟構想は決して恒久的な国際平和を世界にもたらさないのだと批判する。「国際連盟に由て世界の恒久平和が来ると思ふはそれこそ大いなる迷信である，論より証拠である，国際連盟はならない，縦(よ)し成つても平和は来らない，虎や狼の如き自己中心の人類が如何に方法を講じたればとて愛の結果たる平和を実現しやう筈がない（「聖書之研究」第223号聖書研究社，1919年，32頁)。「自己中心」の，悔い改めを忘れた「自己奉仕」に明け暮れる「近代人」と，それらによって作ら

れ，支えられる「近代文明」は人類平和からほど遠いところにあるものだと考えざるをえなかった。

この一連の「人間絶対を謳歌」する内村の近代人批判は「主我」「自己中心」に関心を寄せる三谷にとっても余所事と思われなかった。彼は1926年に上梓した『信仰の論理』の中で「自己」について省察している。彼は自らを省みるとき，自ら一人の誕生を準備するにあたって，幾多の人間と自然が関与し，人類何万年の歴史を要したことかを厳粛に受けとめざるをえなかった。そして生育・発達するにあたっても，多くの「他の存在」がこの「自己」を育て，教え，導いて，現在の「自己」を形成することができたことを素直に認めざるをえなかった。このような事実を踏まえて省察するとき，どれだけの「自己の内容」が「徹頭徹尾己がもの」だと言切れるのだろうかと戸惑わざるをえない。こうした逡巡を抱えつつ，三谷は筆をすすめる。「余一個は余自身にとつても謎である。余自身の根底が余自身にとつても，知られざる或る者である。不思議なる或る力である。或る「他者」である。顧みて自己の衷を探るとき，自己一個の独力によると見るを得べき何物をも，余は見出さない。自己を見つめて深く徹すれば徹するほど，余自身の姿は消えて，余に非る他者の面影を見るの心地がする。余が余自身の根底に於て面接する所のものは，自己でなくして他者である。それは余のみが持つ余の主観であるか。少くとも，我等己が意志を働かして，その欲する所を活きんとする時に，豁然として悟らざるを得ざるものは，我が意志に抗する或る他力ではないか。此力に触るゝ時，我らは自己に眼醒むると共に，又此他力にも眼醒めざるを得ない。或人は此体験を論拠として，外界の実在を証明しようとした。私は此体験を根拠にして，理論的に超越的実在を論結しようとすることの，当れりやを疑ふ。然し実践の世界に於て，他者若しくは他力の体験が，疑ふべからざることであり，且つ最も根本的なものであることを，誰か否み得よう」（『三谷隆正全集』第1巻，31頁～32頁）。

三谷は自己凝視のもとで，「他力」「他者」とふれ合い，その「他者」が「超越的実在」であることを直覚している。そしてその「超越的実在」に自己が根底から支えられているのを実感する。彼は自己を中心として生きる近代人をいささか超克しえたようだ。彼は精神上の転換（conversion），「自力」から「他力」への生き方へと変わりだし，「超越的実在」と共なる生活に参入しだしたことがこの「告白」より窺われる。そしてこの転換を，彼はデカルト（R. Descartes 1596年～1650年）に託して説明する。「若し「我欲す，故に我在り」といふことが，実践的に確実にして疑うべからざる真理であるならば，それと同じ確実さを以て，我を支へ，又我に抗する或る他の力の在ることも，疑うべからざる真理でなければならぬ。然り，「我在り」といふことそれ自身が，我なにかの力に支えられて在り，といふ他力の体験以外の何であるか。デカルトの「我在り」てふ断定も，実はこういふ他力の体験を根拠とするものに他ならなかつたに相違ない。だから彼はその断定を分析して，其処から外界の実在をも，論断しえたのである。然し私は今茲に，理論的に外界の実在を証明しようとしてゐるのでない。只，自力もしくは自己の実践的実在を信ずるものは，又同じ確実さを以て，他力もしくは他者の実践的実在を信ぜざるを得ない事を主張する」（同書，32頁）。

有島は「内部生活」を省察することより，彼が信奉した「神」は「人間の似姿」であり，人

間によって作り出され「造形物」だと判断して，「自己奉仕」に徹することを決断した（拙編著『風の旅人』朝日出版社，2009年，169頁～174頁）。一方，三谷は自己凝視のもとで，「他力」「他者」もその内に見つけ出し，その「他者」，「超越的実在」とふれ合い，それに支えられていることをも実感しだし，その「他者」と一緒に生きようと決意する。

二 「他力」に生きる
―おわりにかえて―

三谷は「数へ年二十九の夏から其翌年の春にかけて，養痾の為め再び湘南の某地に居つた」（『三谷隆正全集』第2巻岩波書店，1965年，196頁）と告げる。それは第六高等学校教授をしていた1917（大正6）年から1918（大正7）年まで，神奈川県茅ヶ崎の肺結核療養所，南湖院（院長，高田畊安　1861年～1945年）での療養生活をさしたものであろう。彼はこの療養生活で生き方の大転換をしたようだ。彼はその折を回顧した文章を残している。「その時私は健康的にも精神的にもひどく行詰つて居つた。」（同書，196頁）。それは「病苦に伴ふ自己執着」「朝から晩迄自分の脈を見たり，自分の熱を気にしたり，自分自身を看護する事のみが天下の一大事で，その他に何物も自分の心を領するものがなくな」（『三谷隆正全集』第1巻，140頁）ってしまったことである。そして内山直にこの苦しみと，その脱却を1918（大正7）年2月13日付けの書簡で告げている。

> 人間は「私」を捨てなければ駄目だね。たとへ病の床に在つてもだ。自分にばかり屈託して，御自分様の御機嫌ばかり伺つてゐるのは愚かだと思ふ。顧みて自分のエゴティズムを懐かしくも残念にも思ふ。何かに我を投じ尽して自分といふものを一切忘れてしまひ度い。敢て冒して我を投じて見度いと思ふ。此断行，此冒険なしには人生の事終いに解し得べからずと思ふ。カアライルの所謂Know thy work & do itの方がギリシャ人の所謂Know thyselfよりも一層適切なるモットーであるといふ事をヒルティーも謂つているやうだが，意味の深い言葉だと考へられる。所詮は意思の問題だ，岩切じやないが，トドのつまりはアクションに落ちつくやうだ。家庭の問題だつてそうなんじやあるまいか。いつまでも想ひめぐらしたつて想ひめぐらすだけじや竟に解決は来ない。右するなり左するなり敢へて冒して経験する他に道はないと思ふ。殊にリーベはいつでも冒険だ。（中略）最後の解決は発して動くより外にないものと僕は信ずるのだ。殊に彼の家庭を以て自己一個への奉仕機関たらしめんとするものは必ず家庭に失敗すると僕は思ふ。一生をして自己一個への奉仕たらしめんとするものも同断，必ず一生を失敗に帰せしめるに相違ない。僕もちと自分一個に奉仕するのみに急だつたやうだ。我執さへ去つたら病気だつて大した苦にもなるまい，或ひは又可なり苦になつても夫に打ち勝つゆくことが出来るだらう。働いてゐる中に活力が増してくるようならばまだ御用の果てない証拠，倒れれば御用の済んだ知らせだ，御用が済んだらサッサと罷り退るが正当の振舞と心得る。（『三谷隆正全集』第5巻岩波書店，1966年，392頁～393頁）

療養生活は「我執」に翻弄され，「自己一個」

への奉仕の空しさを知らされていったようである。そして孔子が「三十而立」と教えたように，数え30歳の三谷はこれからの自らの存在理由は「自己一個」ばかりにかまけることでなく，自らの心身を用いて「他（人，社会，国家，人類）の事」と誠実に向き合い，最良を尽くして関わることにあるのだと気づいた。彼は言う。「私の生活の意味は一に他者にかゝつて居る。神様は絶対に私一個を超絶したまふ。すべてはその神様のためである。私一個なぞは問題にならない。唯私としての最善を用意して，それをそつくり聖前に献上すればいゝのだ。さうだ，その為めの学問だ。また職業だ」と（『三谷隆正全集』第2巻，197頁）。

こうした療養生活での「転換，回心」はイエスの言葉，「自分の命を得ようとする者は，それを失い，わたしのために命を失う者は，かえってそれを得るのである」（マタイによる福音書10・39）との，「自己」を捨て，キリストを愛し，自らの「十字架を背負って」（マタイによる福音書10・24）キリストに従い，他者を自らの如く愛し，愛他に生きる喜びを知らされるものであった。彼は次第，次第に「内部生活」の中で「超絶的他者」の愛の牽引に気づかされ，自力にて生きることから，その「信頼」しえる「超絶的他者」に導かれ，その恩恵（grace）に浴して，自らもまた「愛他」の働きに参与できるのだと実感させられていった。彼は『信仰の論理』の中で，「信仰の冒険の内容」は「棄私」にあり，「他者を求め，愛しての棄私」であり，「神を愛する棄私」であり，「新たなる生命に甦る棄私」（『三谷隆正』全集第1巻，81頁～82頁）であるのだと力強く述べている。「利己」を去って「棄私」，すなわち，「神を敬い，人を愛す」ことに日々，生きるとは正に「新たな生命」に生まれ変わり，新生の日々を過ごしているのだと納得したことだろう。

療養生活中に内山にあてて書いた手紙から1年ほどが経って，親戚の三谷文子あてた書簡（1919年2月23日付け）にも，「愛他」への思念は変わらずに強くなり，「自己中心の信仰を経過して愛中心の信仰，愛実行の信仰に到達［する事］」「「汝の隣人を己の如くに愛する」事，（中略）己の隣人の為めにいと小さき勤めにもはげむ事」（『三谷隆正全集』第5巻，396頁）だと述べている。

三谷はこうした「棄私」「愛他」へと回心する中で，躊躇していた結婚のことを真剣に考えるようになった。それまで，彼は健康を損ねて，療養生活をし，また，多くの家族（弟2人，妹4人）の物心両面の世話をする役目もあったため（『三谷隆正―人・思想・信仰―』岩波書店，1966年，343頁～344頁），そのことを避けてきた。しかし，この回心は彼の心身をも次第に元気づけていったようだ。そして1923（大正12）年1月，新潟県村上出身の児玉菊代（稲葉満他編『内村鑑三の継承者たち』教文館，1995年，186頁）と結婚した。オルガンを上手にひく，「心も姿も美しい」女性であった（『三谷隆正―人・思想・信仰―』，353頁）。そしてこの結婚生活は妹の川西田鶴子が証言するように，隆正にとって「生涯中一番たのしかった」（同書，344頁）ことだろう。けれども，結婚生活は，彼が描きつづけた夫婦二人して，神の前に自己を献げ，従来以上に細やかに，徹底して「利他愛」を行えるものとはならなかったようだ。彼は結婚生活について告白する。「実際はむしろ私のつもり〔私と妻と心をひとつにして自己を神と人との前に献上すること〕の逆であつた。私は俄然として私の全愛を或る一人〔＝妻〕によつて占領せられて終つた。私は面喰つた。悲しくなつた。（中略）然

し勿論幻滅ばかりではなかつた。矢張り結婚は敢行に値する事であつた（『三谷隆正』第2巻，197頁～198頁）と。夫婦二人は徹底して「棄私」に生き，そこから表れる「無私の愛（agapē）」を十全に「隣り人」に表しえなかったこと対し，三谷は悔いた。

けれども，喜びと悔いをもたらすこの結婚は僅か1年半で終わった。菊代は1924年7月4日，天へと召された。また，同年3月7日に誕生した長女晴子は3月29日に母より先に帰天した。結婚を断行して始めたその生活は一粒種が与えられる幸せをもたらした。彼は誕生した晴子のそばで，菊代と一緒に寝顔を見つつ，晴子の「将来について，夢のやうな希望や期待」を語りあったことを記している（同書，205頁）。けれども，この地上での結婚生活は7月4日で終わった。彼は短いこの結婚生活を大好きな詩人テニソン（A. Tennyson 1809年～1892年）の詩を通して振り返っている。

> It is better to have loved and lost, Than never to have loved at all.（ひと度愛して，後失へるは，終にひと度も愛せざりしに勝る。）（同書，198頁）

喪失は時の移り行く中で，神の大きな愛を知らしめ，失ったものへの愛惜を強めてゆくものなのかもしれない。強張った身体を和らげ，冷え切った心を溶かし，気づかなかった失ったものの美しさを知らせてくれるのかもしれない。三谷は長女晴子と妻菊代への「記念の手向草」として表した『信仰の論理』（1926年4月発行）に次のことを記した。悲壮なまでの「棄私」に，神の深い慰めを得た後の「超絶的他者」への強い信頼感が表れている。

私の僅ばかりの来し方をかへり見て，そこに如実に他者の他力を体得し得る。その来し方を彩る大なる転機にして，私が自ら計画し，その計画した通りに成就したのであるものは，殆ど一つだにない。私は私の一生を導くものが，私自身の思案工夫でなくして，或る大なる他者の力であることを実感する。私は私の私意私案が私の為に大なるもの，力あるもの又貴きものをもたらして呉れた事のあるを知らない。私の私案はいつもつまらぬものであつた。徹底せぬ欲求であつた。妥協的愚案であつた。偶々その愚案の実現せられた時，私は自意を就げながら猶不満であることを免れなかつた。然し私の愚案が粉砕せられて，思はぬ痛苦が私の身に臨んだ時，その時に私は予期せざりし満足と激励と感謝とを己がものとすることが出来た。私は私の大なる幸福と人の想に過ぐる満足とが，決して私の私案によつて招来せらるゝものでなく，私の願はざる苦痛と思はざる艱難とを通して，他より与へらるるに相違ないと信ずるようになつた。私は最早私自身の計画の成就されぬ事に失望しない。私は私を導く力が私自身よりは遥に大に，遥に賢くあり，私が私自身を愛するより以上に強く且つ正しき愛を以て私を包む，彼の他者の力と智慧とであることを信じて，安んじて勇躍して人生てふ不断の冒険を冒したく思ふ。私は最早怖るゝことを須ゐない。私の来し方は私にとつては意識的又は無意識的の冒険の連続に外ならなかつた。然し其裏に或る不可思議なる力が断えず私を導きつゝあつたのであることを，私は如実に体験し得た。（中略）［それは］愛の御神の聖なる御導きに外ならない。

（『三谷隆正全集』第1巻，65頁～66頁）

「超絶的他者」の愛は人類一人ひとりを愛惜するものである。晴子と菊代を先に天上へと送った三谷をも愛惜するものである。三谷は「神は，その独り子をお与えになったほどに世（＝人類一人ひとり）を愛され」（ヨハネによる福音書3・16）ている事実を二人の帰天を通してつくづく実感させられていた。彼の心の内を大きく占領した二人の「他者」は三谷にとってかけがえのない存在であり，三谷の現在とこれからを形成する上でどれほど大きな役割をもち，影響を与えるものであるかを日を増すにつれ強く教えられていた。そして「棄私」に生き，「愛他」に生きようとするその人に対し，「超絶的実在」の神はその人を愛惜し，導き，道を備え，ともに永遠に生きようとする。その神の三谷に寄せる愛の事実は二人の喪失を超えて神への信頼を強めさせ，「愛他」に生きることの意義を教える。そして三谷は断行した結婚生活がいかに有意義であったかを知らされる。

地上生活に於けるさゝやかな謙遜なよろこび，パンひとつ，果物ひとつを分けあふ喜び。それは他の何物をも措いて求むべき不滅の宝ではないであらう。然しやさしく美しき喜びである。人生のさうしたつゝましき喜び，さゝやかな幸福，それは決して無意義なものではない。修道僧たちはこのつゝましき喜びを知ることなしに一生を終わるかも知れない。然しそれあるが故に彼等がそれだけえらく，それだけきよくあるのでは決してない。それをえらく思つたり，聖く想つたりするのはカトリク根性である。パリサイ的敬虔である。家庭のうちのこのちひさき喜びを賞美することを，私も少しく学ばしていただいた。この些細な祝福のためだけでも敢へて冒して家庭生活に飛び込んだことは充分に意味のあることであつた。なぜなら結婚は私にとっては乾坤一擲の大冒険であつた。私が自分の一生の使命と信じて居る学問，それをさへ場合によつては妻子のために犠牲にしよう。さうする方が百巻の大著を完成するよりも，より真理に徹したる生き方である。（中略）私はこの覚悟に充分報いられて居つた。家庭のうちなるつましき喜びに祝福あれ！（『三谷隆正全集』第2巻，208頁）

「超絶的他者」の導きのもとで生きる。三谷には，「超絶的他者」は「私自身よりは遥に大に，遥に賢くあり，私が私自身を愛するより以上に強く且つ正しき愛を以て私を包む」のだということを実感・確信することができ，「他力」と「愛他」をもって大正・昭和を生きようとする。「自己中心」と「自己愛」を強めた「近代人」が増殖される同時代の中で，三谷が果たす言論活動，教育活動は人々に，社会に大きな影響と反省をもたらす力をもつものである。今後は彼の思索・実践，あるいは仲間たちの思索・実践を分析し，考究して，彼らが同時代の社会に及ぼした影響力，役割の意義を解明することに努めたい。

資料，参考文献

『三谷隆正全集』第1巻岩波書店，1965年。
『三谷隆正全集』第2巻岩波書店，1965年。
『三谷隆正全集』第3巻岩波書店，1965年。
『三谷隆正全集』第4巻岩波書店，1965年。
『三谷隆正全集』第5巻岩波書店，1966年。

『三谷隆正―人・思想・信仰―』岩波書店，1966年。
「聖書之研究」第162号聖書研究社，1914年。
「聖書之研究」第223号聖書研究社，1919年。
「聖書之研究」第283号聖書研究社，1924年。
『有島武郎全集』第7巻筑摩書房，1980年。
ダンテ著，山内丙三郎訳『神曲』上・中・下岩波書店，2004年～2006年。
ヒルティ著，草間平作訳『幸福論』第1～第3部岩波書店，2006年。
『三谷民子―生涯・想い出・遺墨―』女子学院同窓会，1991年。
安川定男著『有島武郎論』明治書房，1967年。
村松晋著『三谷隆正研究―信仰・国家・歴史―』刀水書房，2001年。
鈴木範久著『内村鑑三日録』11教文館，1997年。
稲葉満他編『内村鑑三の継承者たち』教文館，1995年。
拙編著『風の旅人』朝日出版社，2009年。
A. E. McGrath, Christian Spirituality (Oxford: Blackwell Publishers, 1999)
B. D. Ehrman, Peter, Paul, and Mary Magdalene (Oxford: Oxford University Press, 2006)
A. Nygren, Agape and Eros (London: S. P. C. K, 1953)
B. Russell, History of Western Philosophy (London: George Allen and Unwin, 1961)